

教員養成課程において「学級経営の方法」を修得させる ことを目指した講義内容と講義方法の提案

大 前 暁 政

1. 研究の背景と目的

1-1 研究の背景

近年の教員養成においては、学部段階から、教師に必要な実践的指導力を身につけることが求められている。そして、教職大学院において、より専門的な実践的指導力を身につけることが目指されている。

学部段階の教員養成課程において、教師の質を高める指導を行うことが求められている背景には、初任者教員が、1年目に現場への適応ができず、困難さを抱えている現状が指摘されていることがある。2012年の中央教育審議会答申では、「他方、初任者が実践的指導力やコミュニケーション力、チームで対応する力など教員としての基礎的な力を十分に身に付けていないことなどが指摘されている。こうしたことから、教員養成段階において、教科指導、生徒指導、学級経営等の職務を的確に実践できる力を育成するなど何らかの対応が求められている」としている¹⁾。また、2006年の中央教育審議会答申では、「学部卒業段階で、教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせ、学校現場に送り出すことが、本来、教職課程に期待される役割であり、そのことが国民や社会の要請に速やかに応えることにつながるものとする。」としている²⁾。

特に、教師に必要なとされる専門的な知識の一

つである「学級経営力」に関しては、大学の学部段階において、現場教員の感覚としても、身につけたい力の上位に入ってきている³⁾。さらに、教育委員会や校長を対象にしたアンケート調査では、若い教師への修得が不十分であり、大学の教員養成段階で教授してほしい内容として意識されているものが、学級経営の方法であることが明らかになっている⁴⁾。また、教育委員会が示している「教師として身に付けておきたい力」の例示として「学級経営の方法」が挙げられていることもあり、例えば、東京都教育委員会が作成した学生向けのハンドブックには、大学において学ぶべき三つの領域の一つとして、「学級経営に関する領域」が挙げられている⁵⁾。

ただし、学級経営や学級運営に関する内容に特化された講義科目が、教員養成課程をもつどの大学でも設定されているとは限らず、「学級経営の方法」に関する内容に特化した講義を設定する必要性が指摘され始めている⁶⁾。

1-2 研究の目的

多くの新卒教師は学級担任かもしくは副担任として、学級経営に関わることになる。特に小学校教師は、赴任1年目から学級を受けもつことが慣例となっており、4月から学級担任としての業務が始まり、学級を運営していくための様々な準備をしていく必要が生じてくる。4月

1日に赴任してから、学級びらきまではおおよそ1週間あり、その間に学級名簿の整理や、学級環境の構築、学級の子どもの実態調査、引き継ぎ文書の整理、係活動などの学級活動の諸準備、各種文書の作成、学級びらきの活動の準備などの、学級経営に関する下準備を行っておかなくてはならない。

学校に赴任してから取り組む仕事の多くが初めて教わることであり、多くの新卒教師は、1週間では、学級びらきへの事務的な準備を行うことだけでせいっぱいで、教材研究や1年間を見越した学級経営計画を立てるなど、学級経営を充実させるための方策に時間がとれないままに、学級びらきに至る例が少なくなく、時間が経つにつれて学級経営に困難さを感じる教師が増えてくることもある⁷⁾。

学級経営の方法が十分に子どもに対応したものでない場合、学級びらきから、4月、5月と時間が過ぎていく中で、徐々に学級に落ち着きがなくなり、5月の連休後には学級が荒れてしまっていたというケースや、1学期は何とか学級が落ち着いていても、2学期頃から学級に落ち着きがなくなり、3学期にかけて学級が荒れてしまったというケースが生じる可能性がある⁸⁾。授業が数ヶ月以上も成立しなかったり、教師の指示が通らなかったりする、いわゆる学級崩壊に至るケースも少なくない⁹⁾。学級崩壊にまで発展すると、通常の対応では解決は難しく、荒れた子に対する個別支援のための教員が学級に入ったり、別の教員が授業を補助したりといった体制が組まれていくようになる。しかしながら、学級崩壊の状況までいったケースでは、別の教員が支援に入ったとしても、落ち着きを取り戻すまでに時間がかかる場合が多いと言える。

先に述べたように、教員養成課程をもつ大学では、学級経営に特化した講義は設置されてい

るとは限らない。教員養成課程を要する大学の中には、教育方法論の講義の中で、授業論とともに、学級経営の方法についても教授している場合がある。しかしながら、学級経営に関する内容は幅広く、しかも、1年間という長期にわたっての経営になるため、時期ごとに違った指導方法も必要になり、数回の講義では、学級経営に関する理論や方法の多くを教授することは難しいと考えられる。

近年では、「学級経営論」や、「学級担任論」、「教室経営論」などといった学級経営に特化された講義が、少しずつ教員養成課程において設置されるようになってきている。しかしながら、「学級経営論」の講義において、どのような内容を教授すべきなのかや、その内容をどのように教えていくべきなのかについては、未だ明らかにされておらず、研究の余地が残されていると言える。

そこで、本研究では、学級経営の方法を学生に修得させるためには、どのような内容を、どのような講義方法で教授すればよいのかについて、学級経営の方法を学生に修得させるための講義のあり方についての諸条件を検討した上で、具体的な講義方法と講義内容を提案することを目的とする。

2 研究の実施方法

学級経営の方法を、学生に教授するにあたり、まず必要なのは、学級経営に関するどのような内容を教授すべきなのかという、「内容」を考えることである。学級経営に関する内容は、単に学級を運営するために必要な係活動や、当番活動の組織の仕方などの教室運営上の様々なシステムをつくることだけを意味していないと考える。例えば、学級自体をどのように成長させていくのかという経営論も必要であるし、学級

を構成している子どもたちへの個別指導も必要になってくるであろう。

また、方法の中には、すぐに理解でき実行できるものもあれば、ある程度経験を積まないと技能として定着しないものもあるであろう。一見、難しいと思える方法でも、学級経営を進める上で必要になる方法は教授すべきであると考える。学校現場で経験を積むうちに、実行できるようになると考えられるからである。このように学級経営の内容は多岐にわたると考えられるが、過不足無く学級経営に関する内容を理解させ、修得させるためには、学級経営に関する理論や方法について、幅広くまとめることが不可欠と考えられる。その際、文部科学省が2012年の中央教育審議会答申で指摘している通り、新卒教師が1年目に、現場に適應できるだけの内容を教授するという意識しておくことが必要であると考えられる。

学級経営の内容を明らかにするために、まず第一に、かつては学級経営に特化された講義科目は少なかったが、近年になって講義科目が設定されている大学が出てきたことから、現代の教員養成課程をもつ大学において、学級経営に関してどのような内容が教授されるべきなのかを、シラバスを参考にしながらできるだけ多様な内容を挙げることで、考えていく。参考にしたシラバスはインターネット上で、学級経営に関する講義内容の全体像と内容が公開されているものに限定した。また、学級経営に関する講義について、学級経営に特化したシラバスだけでなく、教育方法論の中で学級経営の内容を扱っている場合は、教育方法論の講義で行われている内容も参考にすることとした。

ただし、学級経営に特化した講義科目は未だ多くなく、これだけではどのような内容を教授すべきなのか不足することも予想される。そこで第二に、学級経営に関して現場教師が実践

している内容を参考にしながら、著者の現場経験をもとにしつつ、学級経営に関してできるだけ多様な内容を挙げていくことで、教授すべき内容を考えていくことにする。

先に述べたように、新卒教師でも1年目に学級を受けもつ現状を踏まえ、新卒教師であっても、適切に学級を経営していけるだけの方法を教授することが必要であると考えられる。大学で教授すべき学級経営の方法を考える上では、現場の学級担任の具体的な仕事における実践内容を参考にすることで、具体的な内容が見えてくると考えられる。

また、講義内容について、どのような内容を教授することで学級経営の方法が修得されるのかが見えてきたら、次に講義方法を考えることが必要になる。実践的指導力を学部の教員養成課程段階で身につけることが求められている以上、より学生が主体的に自分から学び、より深く学級経営に関する内容を理解し、修得するための講義方法のあり方を、まとめることが必要になる。

学級経営の方法を修得させることを目指した「学級経営論」や「学級担任論」、「学級運営論」といった名称の講義は多くなく、実践例はあまり報告されていない。そのため、実践報告の論文から講義方法を参考にするとともに、教員養成課程を要する大学の中で、学級経営の方法を修得させることに特化した教職専門科目が設定されているところについては、内容を調べる際に参考にしたシラバスにおいて、どのような講義方法がとられているのかを参考にしながら、具体的方法を挙げていくことで、講義方法について考えていくことにする。

また、大学によっては、教育方法論の中で、学級経営に関する内容も教えている場合があるため、教育方法論などの他科目の講義実践も参考にすることにする。

3 「学級経営の方法」を修得させること を目指した講義内容についての結果

3-1 教員養成課程における大学講義において 教授されている学級経営の内容について

学級経営に関してどのような内容が教授されるべきなのかを考えるため、シラバスを参考にしながら、学級経営に関する内容についてできるだけ多様な内容を挙げていくことにする。シラバスについては、教員養成課程の課程認定を受けている600校の大学のうち16校(2.7%)の大学のものを参考にした¹⁰⁾。参考にした大学種別の内訳は国立大学6校、私立大学10校である¹¹⁾。

- ・学級経営案の作成と活用、評価
- ・学級目標の設定の仕方
- ・保護者、地域社会との連携
- ・いじめの防止
- ・道徳指導
- ・学級担任の服務と管理
- ・係りと当番の仕事
- ・清掃・給食の指導
- ・学級担任の一日の仕事と学級事務
- ・望ましい学級集団づくり
- ・特別支援教育と学級経営
- ・学級通信の作成と意義
- ・学級担任としての心構えとリーダーシップ
- ・学級経営、学級編成の歴史と原理
- ・学習環境の整備と安全管理
- ・教科指導と学級経営
- ・学校行事指導
- ・学校経営と学年・学級経営の関係性と意義
- ・子ども理解と生徒指導
- ・学級崩壊の現状と課題
- ・不登校などの支援が必要な子どもへの予防と対策
- ・幼稚園や保育所との連携
- ・教室におけるレクリエーションや楽しい雰囲気
のつくり方、子どもの活躍のさせ方
- ・指導要録と通知票の作成
- ・学級びらきにおける学級のルールやマナーなど
の仕組みづくり
- ・学級活動の意義と内容

シラバスを参照したところ、上記の内容について、2単位時間以上の時間を使って教授されている場合もあった。例えば、「いじめの防止」に関する内容で2単位時間、「学級崩壊の現状と課題」に関する内容で3単位時間、「不登校などの支援が必要な子どもへの予防と対策」に関する内容で2単位時間の時間が与えられている場合が見られる他、教師の専門性に特化して、1年間の学級の指導方法について6時間程度の時間をとって解説されている場合もあった¹²⁾。また、教育方法論などの、学級経営に特化されていない講義科目の一部で学級経営に関する内容を教授されている大学もあり、その場合は、上記に示した一部の内容が教授されていた。

大学によっては複数の講義の中で、学級経営に関する内容が教授されており、例えば、秀明大学学校教師学部では、2014年のシラバスによると、「初等学級経営論」の他にも、「学級経営の理論と方法」の講義を設定し、学年が上がるにつれて、より高度な学級経営の方法を教えるようになっている¹³⁾。

「学級担任論」という名称で行われている学級経営に特化した講義科目は多くなく、シラバスが公開されているものとして例えば、富山大学人間発達学部で行われている。富山大学では、「学級担任論」で「学びのアシスト」体験をすることで学級担任の具体的な仕事を学ぶことを狙って設定されているものである¹⁴⁾。いわゆる講義形式だけでなく、現場との連携を行いながら学級経営の内容を教える講義である。このような、現場体験型の講義はまだ少ないと言えるが、一部の大学で行われ始めている。

また、他科目で学級経営に関する内容を教授している大学の例として、鹿児島大学教育学部では、2年生や3年生の学生に対して、「教職実践研究Ⅱ」という講義科目の中で、学級経営に関する基本的な知識・技能が教授されている¹⁵⁾。

この講義の内容として、第1ステップとして、「学級経営の基本的な考え方や学級担任の役割」を学び、第2ステップで「地域の特色を生かした少人数・複式学級のある学校現場での実地観察や経営案の事例研究」、第3ステップでは、「実地観察校での学級担任を仮定した学級経営案の作成とその経営案の説明を行う模擬学級PTAなど」を教授することとなっており、学生の学校教育の理解が深まったことが報告されている。

3-2 学校現場教師の学級経営の実践について

先に述べたように、学級経営の方法を修得させる上で、今度は学校現場教師の実践を参考にしながら、著者の現場経験をもとにつつ、学級経営に関してできるだけ多様な内容を挙げていくことで、どのような内容を教授すべきなのかを考えていくことにする。

学級経営の方法として、4月にまず行うことになるのは、学級の事務的仕事である。例えば、名簿作りや、備品の購入と管理、学級環境の安全整備、テストや教材教具などの選定、机と椅子の整備、掲示物の準備と掲示、指導要録の整理と管理、週案簿の作成と管理、学級園の準備、家庭訪問や学級懇談の準備などである。これらの仕事は、学級担任になると必ず直ちにではなくてはならないことばかりである。上記の仕事の中には、機械的な事務作業も含まれるが、中には学級経営に重要な役割を果たすものもある。例えば、学級通信づくりによって、学級経営の様子を情報公開し、保護者との協力を円滑にするとともに、日々の教師自身の教育活動の振り返りを行うという取り組みもあり、学級経営の事務的な仕事とはいえ、重要な学級経営の要素となっている¹⁶⁾。このような仕事を、「学級事務の内容と方法」と表現することにする。

次に、学級びらき直後から学級担任がしなく

てはならないのは、学級集団の統率である。学級に集められた子どもたちは自ら望んで集まったわけではなく、集まった集団にはまとまりがないと考えるのが自然である。集団としてのまとまりがない状態の30人から40人の学級の子どもたちを、導いていくことが教師に求められている。統率の仕方を知らない場合は、学級が上手く機能しなくなる場合もあり、学級担任としては、学級経営を進めていく上で、子ども集団を統率していくための力が必要とされている¹⁷⁾。さらに、教師の統率の仕方を変化させ、1学期は強く導いていく統率の仕方から、3学期に近づくにつれて、もしくは、学年が上がるにつれて、「コーチング」的な対応に変化させることによって、子どもの自律的な行動を促す実践も行われている¹⁸⁾。つまり、教師が先導し、子どもたちを強く導いていく統率から、子どもたちを陰で支え、子どもの思いや願いを引き出しながら支援していくコーチングへと、教師のリーダーシップの在り方が変わってくるのが考えられる。このような内容を、「集団統率とリーダーシップの発揮の仕方」と呼ぶことにする。

学級びらきから、すぐに学級担任がすべき仕事は他にもあり、例えば、「学級目標づくり」が挙げられる。学級目標をつくり、その学級目標をもとにして学級をつくっていくことに力を入れる取り組みもある¹⁹⁾。この学級目標づくりは、学級の望ましい姿を教師と子どもとが考える作業であり、子どもの願いを学級経営に反映するとともに、学級経営のゴールを子どもたちと教師が共有する重要な活動であると考えられる。学級目標をつかった後に、個人に目標を書かせる場合もある。子ども個人に目標を書かせる場合は、「勉強面、生活面、その他」などの内容別に目標を設定させていく。個人の目標を書かせる場合にも、この学級目標が活かされ

ることもある。例えば、生活面での目標を考える際に、友達とどういう関係をつくりたいのかや、学級の中で自分の活躍の場を考えることが必要になるからである。これらの学級の目標や、個人の1年間の目標づくりは、それだけで重要な役割を占めると考えられる。これらをまとめて「学級と個人の目標づくりの方法」とする。

学級担任の多くが、学級びらき直後の1週間でやることの中に、「日直、当番、係活動、班」など、学級をスムーズに運営していくための組織やシステムをつくりあげることが挙げられる²⁰⁾。日直や当番のやり方は、学校ごとに決まっていることもあるが、基本的には各教員の工夫に任されており、学級の実態に合ったやり方が求められていると言える。特に係活動には様々なやり方が開発されており、工夫を取り入れることによって、学級経営の充実に大いに役立つことは想像に難くない。係活動や当番活動を工夫することによって、スムーズに学級生活を送ることができるようにするとともに、活動を子どもたち主体とすることで、子どもの創意工夫を促し、より楽しく充実した学級生活を送ることができるようにする効果もあると考えられる。そのため、係活動や当番活動の組織づくり、システムづくりに力を入れることも、学級経営の大きな一つの要素となっている²¹⁾。学級で日直や当番、係活動、班活動のシステムをつくることを、「学級のシステムづくりの方法」と呼ぶことにする。

学級のシステムをつくと同時に、学級のルールづくりや、モラル、マナーの指導も行う必要が生じる²²⁾。複数の学級が学年にある場合、学級によってルールが異なっていることは少なくないと考えられる。複数の学級から集まっている以上、共通したルールの設定が早急に必要になる。ルールの共有ができていないと、それぞれの子どもが自分が去年まで守ってきたルー

ルをそれぞれ主張し始め、混乱が生じることが予想される。複数の学級が学年になくても、教師の教育方針によってルールが異なることもあり、子どもの発達段階によってもルールは変わってくる。また、学校で決まっているルールの徹底も必要になる。さらに、集団生活を学級で送るためには、学級に共通したモラルとマナーの指導も行わなければならないと考えられる²³⁾。社会的に共通したモラルやマナーというものは、大枠は共通していると思われるが、家庭によって教育されている内容が異なることもあることが予想され、学級で集団生活を送るためのモラルやマナーを共通理解させていくことができなくては、これもまた混乱のもととなると考えられる。特に、教師が絶対にこれだけは守って欲しいモラルやマナーを、学級びらきの最初に宣言し、丁寧に指導することが必要になると考えられる²⁴⁾。このようなルールやマナー、モラルを子どもたちと教え、そして共有させていく際に、ヒデユンカリキュラムの概念を学級経営に取り入れるという手法も開発されている²⁵⁾。つまり、暗黙的に間違ったルール、マナー、モラルを教えないように注意するとともに、教師の態度や姿勢、言動から、よい影響を子どもに与えるように、意図的にヒデユンカリキュラムを利用するという手法である。これらの内容を、「ルール、マナー、モラルの指導方法」と呼ぶことにする。

学級びらきの出会いの指導も重要視されている。特に学級びらきから1週間で教師が学級経営の基本的な方針を宣言することや、新しい学級で生活する上で子どもたちを安心させるためにどのような指導が必要なのかを知っておく必要がある。また、学級びらきまでにどのような諸準備が必要なのかや、1週間でどのような指導を行う必要があるのかの全体像をつかんでおくことも必要になる。学級びらきから1週間を

きちんとした形で指導できれば、その後の学級経営も安定すると考えられており、学級びらき直後の指導は大切にされていると言える²⁶⁾。この指導内容を、「学級経営スタート時の指導」と呼ぶことにする。

学級経営をする上で、以前は教師主導の形で、経営を行っていくことが多かったが、最近では、子どもたちの意見を学級経営に取り入れたり、子どもたちが中心となって学級の課題を解決したりといった、子どもが参画する学級経営が見られるようになった²⁷⁾。この学級経営の手法では、子どもたちの具体的活動として、定期的には何度も話し合い活動が設定されており、そこで、学級で起きた出来事を振り返ることができるようになってきている。話し合い活動の中では、よかったことを発表するだけでなく、改善した方がよいところや問題点も提案される²⁸⁾。そして、自由な雰囲気の中で話し合いが行われ、学級の方向性が、子どもたちと教師で決められる形をとる。このような、話し合い活動を行うことで、子どもたちが学級経営に参画する方法も学んでおくことが必須であると考えられる。この内容を、「子どもたちが学級経営に参画するための方法」と呼ぶことにする。

また、学級経営の大きな柱として考えられるのが、集団づくりである。集団づくりとは、学級に集められた子どもたちを、集団としてまとめていくことを意味している。具体的には、子ども同士の関係を良好なものにし、チームとして協力や協調ができるようにしていくことを指す²⁹⁾。集団づくりをするためには、集団をチームとしてまとめていくための手法を学ぶ必要がある。また、集団に入りにくい子や、協力できにくい子、トラブルを起こす子などへの、個別指導も必要になってくる。さらに、集団として何か大きな活動を行う際にも、集団としてのまとまりの有無が問われることになり、多人数で

一つの活動をする際の指導が必要になる。また、望ましい集団がつくられたかどうかを評価・改善するためのソシオメトリックテストやQUなどの調査手法を学ぶ必要もある³⁰⁾。このような、集団をチームとしてまとめていくための方法を、「集団づくりの方法」と呼ぶことにする。

学級経営をしていく上で、子どもを、リーダーとして育てていく取り組みも行われている³¹⁾。リーダー体験を通すことによって、主体性や積極性を養うことができるとともに、リーダーの大変さを実感として理解させることもできると考えられる。すなわち、集団を動かすことは大変なことや、自分勝手な行動は集団の迷惑になっていることを体感的に理解できることが考えられる。そして、次にリーダー以外の役になったときに、リーダーに協力しようとか、集団全体のことを考えて動く姿勢が生まれてくることが予想される。そのような、学級の子どもたち全員にリーダー体験をさせ、やがては全員がリーダーという意識をもって集団生活をより充実したものとして送れることを狙った取り組みも、学級経営の一つの大切な要素であると考えられる。この内容を、「リーダーづくりの方法」と呼ぶことにする。

さらに、イベントをすることによって、学級づくりを行う取り組みも行われている³²⁾。学級では、様々なイベントが考えられる。係活動単位のイベントから、学級全員で企画と運営を行うという大きなイベントもある。また、全校を対象としたイベントを学級で考える場合もある。そのような、大規模なイベントでは、許可をとったり、企画書をつくりあげたり、準備物を自分たちで用意したりと、やることも責任も飛躍的に増える。成功する場合もあれば失敗する場合もあるが、そのような成功と失敗を繰り返しながら、集団としてまとまっていくことを期待した取り組みである³³⁾。これを、自治

の取り組みとして、学級経営の最終段階に、子どもたち主体の企画をさせ、運営も準備も子どもに任せるといった実践も行われている。このような学級経営の内容を、「イベントづくりの方法」と呼ぶことにする。

最近では、学級経営をしていく上で、授業づくりと関連させていく実践も行われている。つまり、学級経営と授業づくりを連動させて、相乗効果を狙う取り組みであり、授業づくりを学級経営の大きな柱としてとらえるものである。具体的には、授業づくりの段階を、基礎基本の学習を中心に行っていく初期段階から、やがて、主体的な学習を促していく段階になり、そして、子ども同士が協力して発展的な課題や、自分たちの疑問を解決していくという協同学習の段階へと進み、最終的には、高い目標を設定させて、子どもに自己実現を促していく段階へと進んでいく。このような、各段階の授業づくりの中で、子どもたちを集団としてまとめたり、子どもたちの成長を促したりしていく取り組みである³⁴⁾。また、授業づくりを学級経営と関連させる方法として、授業規律をきちんと子どもに徹底させることで、学級経営に生かす手法や、「楽しい授業」、「分かる・できる授業」を保障することによって、子どもたちの自律を促したり、生活する上での意欲をわき起こしたりすることを狙う取り組みも行われている³⁵⁾。このように、授業づくりと学級経営を関連させる方法を学ぶ必要があると考えられ、このような内容を「授業づくりと学級経営を関連させる方法」と呼ぶことにする。

学級集団の差別構造をなくすための様々な学級経営上の取り組みが行われている³⁶⁾。いじめの防止は喫緊の課題であり、学校ぐるみで防止対策がとられることが求められているとも言える。学級では、特に学級担任がいじめにつながるような差別的な行動に対して指導する役

を担っている。いじめの防止には、単なる児童観察によるものだけでなく、アンケート調査や教育相談、そして保護者との情報交換や養護教諭などの他の教師との連携が欠かせない。いじめを防止するだけでなく、いじめが起きたときに対応する方法や、いじめを根絶するための取り組みを長期にわたって続けていくことが必要となる。このようないじめの防止のための取り組みは、学級経営をしていく上で非常に重要だととらえることができる。このような学級経営上の取り組みを、「差別やいじめをなくす方法」と呼ぶことにする。

さらに、学級には問題行動を起こす子どもや、基本的な生活習慣が身につけていない子、不登校などの子もいることがある。このような子どもには、生活指導や生徒指導を行っていかなくてはならず、学級担任は学級経営をしていく上で、それらの方法を学んでおく必要がある³⁷⁾。子どもに対応する際は、対処療法的に、問題行動が起きたらその都度対応するといった形だけでなく、根本的解決をしていくために、心理学的な手法や社会的な支援を行う手法も学び、長期的な視野をもって解決に望むことが大切になる³⁸⁾。そこで、心理学的な手法や、社会的な支援をする手法などを学生時代に理解しておくことが必要になると考えられる。さらに、子どもの問題行動の背景には、子どもの資質の問題だけでなく、家庭環境の問題から止むにやまれず問題行動に至っている例もあり、子どもへの対応方法だけでなく、医療関係者や児童相談所、地域のPTA役員など、各種教育関係機関や、医療、保護者や地域などとも連携して解決することが求められている³⁹⁾。このような、問題行動に対する生活指導や生徒指導などを行っていく手法を、「個別の生徒指導の方法」と呼ぶことにする。

また、子ども一人一人への対応法も、学級経

営では重要であると考えられる。特に小学校教師に関しては、6年間という長きにわたり教育を行うため、1年生を担当した次の年に、6年生を担当するケースもある。思春期に入る高学年と、入学したばかりの1年生とでは、子どもに対応する方法は違っていると考えられる。特に、小1プロブレムが叫ばれている昨今、小学校1年生の入学時点では、学校生活に適應する上で、様々な支援が必要になる⁴⁰⁾。また、思春期に入る子どもへの指導法も実践研究され、重要視されている⁴¹⁾。発達段階に合わせた指導の他にも、子どもの個性に合わせた指導も必要になり、仲間をつくりにくい子への指導や、乱暴な子への指導、集団行動がとりにくい子への指導など、様々な指導法が研究・開発されている⁴²⁾。子どもへのほめ方や叱り方の手法や、自律的な行動に導くための手法など、具体的にどのように子どもに対応していけばよいのかを学ぶことは有益であると考えられる。これらの内容は、「子どもへの対応法」と呼ぶこととする。

学級経営をしていく上で、特別支援を必要とする子どもたちへの支援を行っていくことも、重要視されてくるようになった。特別支援教育に対応できないで学級が荒れてしまったり、発達障害をもつ子どもが不適応を起こしてしまったりという例もあるが、反対に、特別支援を要する子に適切な支援をしてよりよい学級をつくっている実践も見られる⁴³⁾。特別支援教育では、個別支援が必要な子どもに対し、個別の指導計画をつくり、医療関係者や保護者との連携のもと、長期計画と手立てを考え、フィードバックを行っていかなくてはならない。また、学校内での連携体制をつくったり、養護教諭や特別支援コーディネーターの教諭との協力関係も築く必要がある。また、特別支援教育会議での報告義務や、1年間の指導の結果を保護者に説明する責任が生じてくる。言葉の遅れや、情

緒不安定のためにさらなる支援が必要な場合には、児童相談所や通級指導教室などとの連携も行わなくてはならない。これらの学級経営の中で行っていく特別支援教育の内容は、非常に多岐にわたっており、学級担任になってから学ぶのでは間に合わないことが予想され、現場への適應が困難になると考えられる。最近では、特別支援を要する子への支援だけでなく、学級にいる全員の子どもに対して、子ども一人一人に適した教育的支援を行っていくという「インクルーシブ教育」の考え方や、学級にいる全員にとって無理のない支援を最初から取り入れていくという「ユニバーサルデザイン」の考え方が広がってきている⁴⁴⁾。これらの支援の考え方の根本となっているのが、どの子どもに対しても、授業、集団行動、行事など、学級生活を送る上で不適応を起こさないようにするというものである。これらの支援をまとめて、「特別支援教育の方法」と呼ぶことにする。

また、学級経営では、保護者や地域との連携も重要な仕事の一つであり、連携を進めることによって、より効果的な学級経営を行うことができる⁴⁵⁾。保護者の要求にどう応えていくのかだけでなく、時には、児童相談所や心理カウンセラーなどとの連携も必要になる⁴⁶⁾。また、小1プロブレムや、中1ギャップなどの問題現象があるように、学校種間での連携と協力も求められていると言える。このような学級経営上の取り組みをまとめて、「学級経営に資する連携と協力の方法」と呼ぶことにする。

さらに、学級経営の具体的な方法だけでなく、学級経営自体を進めていくための、「マネジメントの方法」も理解できていないと、学級経営の具体的な方法を運用することが難しくなる。そのため学級マネジメントの方法が様々な開発されており、学級担任は、自分だけの思いから学級経営をするのではなく、学校の目標や保護

者の願い、子どもの願いも加味しながら、組織的、計画的、意図的な学級経営ができなくてはならなくなってきている⁴⁷⁾。つまり、学級担任は、地域からの要望、学校の経営方針、保護者の要望、子どもの願いを踏まえ、学級経営案をつくり、それを運用していく力を身につけなくてはならないと言える。計画的、組織的、意図的に学級経営を進めていくための方法を理解し、実践することで、長期的な視野に立った学級経営が行えるはずである。具体的には、学級の子どもたちの実態調査を行い、学級の子どもたちに合った目標や手立てを立案し、実行し、評価改善するというフィードバックを行う。このようなサイクルを繰り返すことによって、学級経営の具体的な手法がより生かされると考えられる。この学級マネジメントを行っていくための内容を、「学級マネジメントの方法」と呼ぶことにする。

さらに、全体的な学級経営の方針を決めるための理論背景も知る必要がある。つまり、学級経営のマネジメントを行っていく上では、学級をどのような方向に成長させていくべきなのかの、理論的背景が必要となる⁴⁸⁾。学級経営を行う際に、やみくもに学級を動かしていくのではなく、何らかの方向性をもって、ゴールを設定しながら、経営を行っていかなくてはならないと考えられる。このような、学級経営を行っていく上での理論的背景は、現場教師や大学教員の研究によって明らかになってきている⁴⁹⁾。例えば、義務教育段階では、子どもの自立を意図した学級経営が求められていると言える⁵⁰⁾。最初は教師主導で学級経営を行っていたとしても、だんだんと子どもが自治できるような形で支援をすることが求められる。他にも、学級が歴史的にどのように成立してきたのかや、学級経営方針は時代にとってどのように変わってきたのかの、歴史的な背景を学ぶことも必要にな

る。このような理論的背景を知っておくことで、学級経営の具体的手法の選択肢が変化するし、時期や発達段階によって、手法を変えるとといったことも生じてくる。これらの内容を、「学級経営を進めていく上での理論的背景」と呼ぶことにする。

以上のように、学校現場教師の実践を参考にすることで、学級経営に関する内容として、以下のものを挙げる事ができた。

- ・学級事務の内容と方法
- ・集団統率とリーダーシップの発揮の仕方
- ・学級と個人の目標づくりの方法
- ・学級のシステムづくりの方法
- ・ルール、マナー、モラルの指導方法
- ・学級経営スタート時の指導
- ・子どもたちが学級経営に参画するための方法
- ・集団づくりの方法
- ・リーダーづくりの方法
- ・イベントづくりの方法
- ・授業づくりと学級経営を関連させる方法
- ・差別やいじめをなくす方法
- ・個別の生徒指導の方法
- ・子どもへの対応法
- ・特別支援教育の方法
- ・学級経営に資する連携と協力の方法
- ・学級マネジメントの方法
- ・学級経営を進めていく上での理論的背景

4 「学級経営の方法」を修得させることを目指した講義方法についての結果

過去の教員養成課程における「学級経営を教える講義」については、「学級経営論」や「学級担任論」などの特別な講義名の講義を行うわけではなく、主として教育方法論の時間の一部を活用している場合が見られた。そこで、過去の講義方法を参考にするにあたり、先に述べたように、まずは教育方法論の講義方法を参考にしつつ、具体的な講義方法を挙げていくことにする。

教育方法論の講義では、過去の講義形式とし

て一般的に見られたのは、大学教員が前に出て、一斉教授を行い、内容の解説が中心になるといいう講義形式である。この講義形式は、一斉教授形式と呼べるものであり、講義で話される内容は、大学教員があらかじめ用意していた資料であり、一方通行的に大学教員から学生へと情報が伝達される形であった。ただし、この講義方法では、大学教員が重要だと考えている内容を、学生に対して解説する講義になり、時には説明調になったり、多くの重要な内容を教え込み過ぎたりすることがあり、理論や方法を学生に修得させる上で、学生にとっては必ずしも有益な学びにならない場合も一部生じていた⁵¹⁾。

最近では、グループ活動を取り入れて、学習者が課題を選択し、その課題に対する情報を集めたり、個人で思考したりした上で、それぞれの内容をグループで共有し、重要な点に絞って発表し、情報の共有を行うという協同学習形式の実践も行われるようになってきており、学習内容の幅広い理解に効果があることが報告され始めている⁵²⁾。このような協同学習を行うことで、学習者主体の講義が行われることが考えられる。ただし、学習者自身に、ある程度の知識の蓄積と経験がなければ、問題解決をする上で困難さを感じさせる場合もあり、また、初学者の場合は、学習者同士で情報交換や発表会を行ったとしても、浅い知識の共有で終わってしまい、理解が不十分で終わる可能性も指摘されている⁵³⁾。

では、最近になって少しずつ増えてきている「学級経営論」や「学級担任論」などの、学級経営に特化した内容で行われている講義では、どのような講義形式で行われているのだろうか。

講義内容をまとめる際に参考にした大学の多くは、一斉教授形式で行われるか、もしくは一斉教授の中に協同学習を取り入れているものが

見られた。

特徴的な講義の方法としては、富山大学の「学級担任論」において、現場体験型の講義形式がとられており、講義（4月～6月中旬）と、小学校でのフィールドワーク（6月下旬～3月上旬）とが合わさった形で講義が進められている。フィールドワークでは、実際の現場体験を通すことで、授業や学級経営をどう進めるのかや、子どもに視点に立った支援について学ぶことを狙っている。

また、先に示した鹿児島大学教育学部の「教職実践研究Ⅱ」では、講義方法の特徴として、「小規模・複式学級での実地観察」や、「学級経営案作成」、「模擬学級 PTA での経営案の説明」などの、実地指導と、体験活動、発表会が行われていることが挙げられる。

このように、一斉教授形式と、協同学習形式以外にも、現場体験型の講義や、模擬体験型の講義が行われている場合もある。

5 考察

5-1 「学級経営の方法」を修得させることを目指した講義内容に関する考察

上記の結果をもとに、学級経営の方法を習得させるためには、具体的にどのような内容を教えるべきかを考えていく。

大学のシラバスを参考にしたところ、学級経営に関する内容を幅広く網羅的に教えている大学もあれば、一部に特化して教授している大学、教育方法論などの別科目の講義で一部の内容を教授している大学があった。参考にした大学以外の大学では、学級経営に特化された講義科目が設定されていない場合も見られた。

学校現場の教師の実践を参考にしてまとめた、学級経営に関する内容と、大学で教授されている内容と比べると、共通する内容もあり、

大学で教えられている内容は全て、現場教師の実践を参考にした内容の中に含まれていた。ただし、大学で教えられている内容とはやや異なった内容もあり、例えば、「子どもたちが学級経営に参画するための方法」、「子どもへの対応方法」、「リーダーづくりの方法」など、現場では重要視されていても、大学でほとんど教授されていない内容も見られた。また、大学では「学級経営スタート時の指導」を教授している大学は多くなく、一部教えられている大学でも、学級びらき直後における子どもへの挨拶や、係・当番活動のつくり方、出会いの子どもへの対応などに留まっている場合が見られるが、学校現場では「学級経営スタート時の指導」は非常に重要視されており、特に最初の一週間で学級の目標や学級の仕組みをつくってしまうことや、学級のルール、モラル、マナーの徹底、楽しい授業の実施、個人の目標づくり、成功体験の指導、差別をなくす指導、いじめ防止など多岐にわたった指導が意図的に行われており、今後、大学でも詳細な講義が必要になると考えられる。

さらに大学の講義内容と、学校現場での実践と研究における内容には、やや内容の質が異なると考えられるものが見られた。例えば、大学では、意義や理論、歴史などが教えられているのに対し、学校現場での実践と研究では、意義や理論、歴史的な背景などではなく、具体的な方法と、技能が多くなっている。例えば、「生徒指導」に関するものとして、大学では「生徒指導の理念と歴史」が教授内容になっている場合が普通に見られるのに対し、学校現場の教師の実践や研究に見られる内容としては、具体的に子どもにどう接したらよいのかという方法論と、技能が中心となっている場合が多く見られた。他にも、大学では、「学級経営、学級編成の歴史と原理」のような歴史や理論が教授され

ている場合が少なくないが、学校現場での実践と研究では、学級経営自体をどのように進めていけばよいのかという方法論や技能が主となっている。学校現場での実践と研究が、方法と技能が多くなっているという事実は、もちろん、大学での講義と学校現場教師による実践と研究という場の違いがあるからであるが、しかしながら、学校現場教員にとっては、そのことを学ぶ必要性が存在するということであると考えられることもできる。現場教師が、学級経営の具体的な方法が分からないままに学級経営を行うと、学級が荒れるケースが起きていることから、方法や技術を教授していくことは必要であると考えられる。

ここで、学級経営に関する内容のうち、意義や理論、歴史などをまとめて「理論」と呼ぶことにする。そして、学級経営に関する内容のうち、具体的にどのように学級経営を行っていくのかや、生徒指導の方法、学級のシステムづくりの方法など、具体的な技術や方法を、「技術・方法」と呼ぶことにする。内容を考えるにおいて、大学で教授すべき内容として、やや「理論」に偏って教授されている場合も見られたため、現場教師のニーズに応えるためにも、「理論」だけでなく、「技術・方法」も、バランスよく教授していくことが必要なのではないかと考えられる。

5-2 「学級経営の方法」を修得させることを目指した講義方法に関する考察

一斉教授形式を基本としながらも、最近では、学生のグループワークを取り入れた協同学習形式での講義が行われているところが見られた。協同学習を取り入れている講義では、興味のあるテーマに沿っていくつかのグループに分かれ、学生が調査し、その学びをまとめた上で発表する形で講義が進められていた。今後の講義

形式を考える上では、一斉教授形式で、大学教員が一方通行的に理論や方法を解説するだけでなく、学習者自身が何らかの問題意識をもって主体的に学んだり、学習者同士が交流したりことによって、学びを豊かにしていくことが必要になってくると考えられる。

また、現場体験と連動した形が取り入れられている大学もあり、現場体験を通すことで具体的な学級経営の方法を理解させる取り組みも見られた。このような現場体験型の講義で行われているように、理論を教えるのは重要になるのはもちろんのこと、現場体験に近い情報を与えて、現場の具体的な事例をもとに検討したり、情報交換を行ったりしていく講義が望ましいと考えられる。現場の事例をもとに、具体的に考えさせることで、現場体験に近い学びになることが予想され、学習者によってより理解が深まると考えらるからである。

さらに、先に述べたように、理論だけでなく、技術・方法も教えていくことが必要になるが、その中で、技術・方法は、理解しただけでは、使いこなせないものも存在すると考えられる。例えば、「いじめをした子どもへの指導」、「ルール・マナー・モラルの指導」などは、具体的な技術・方法を知ったらといって、すぐにうまく実行できるものでなく、ロールプレイなどの体験を通して実行できるだけの技能にまで高まるものであると考えられる。つまり、技術・方法を教授し修得させることが必要であるということは、その技術・方法を身につけ、使いこなせるまでの「技能」にまで高める必要があるということの意味しているといえる。参考にした大学の中には、模擬学級PTAでの説明会を実施するなどの、模擬体験を通した演習形式も取り入れられているところが見られた。模擬体験だけで多くの講義時間を使ってしまうと、網羅的に様々な内容が教授できない恐れがある。そこ

で、一斉教授形式で進めながらも、技能にまで高めないといけない技術・方法を教授した際に、適宜ロールプレイなどの活動を取り入れることで、技術・方法を技能にまで高めることを促すような講義方法の工夫を取り入れるべきであると考えられる。

以上のことを踏まえ、1時間の講義を次のように展開することを提案したい。

①学級の具体的な事例を提示する。

②学生個人に、具体的な事例に対する対応を考えさせる。

③学生同士で、対応法を交流させる。

④教員による模範的な対応法の演示や、現場で行われている実践例をいくつか示し、理論的背景の解説を行う。

⑤技術・方法を技能として修得させる必要がある場合は、さらに具体的な事例をもとに、ロールプレイなどの模擬体験活動を行う。

⑥学生からの質疑応答に答える。

⑦学生個人に、学びをまとめさせる。

最初に、できるだけ現場の様子をイメージさせるためにも、学級の具体的な事例を提示することが必要であると考えた。必要があれば、教室の具体的な様子が分かるように、映像を使用することも効果的であると考えられる。具体的な事例をもとに、学生自身に対応を考えさせることで、学級の具体的な技術・方法に気付かせることができるだけでなく、その対応の意味や意義なども考えるさせることができると考えた。

また、その後に協同学習の場を設定し、学生同士での対応方法の交流を行わせることで、学生の学習への主体性を引き出すことができると考えた。

さらに、協同学習の弱い部分であった、初學者同士の交流だけでは、浅い知識の共有に留まってしまう可能性をできるだけ排除するた

め、教員による解説を行う時間を確保し、学生自身が気付かなかった視点を与えたり、幅広い実践を紹介したりするなどの時間をとることが必要になると考えられる。現場の具体例をもとに、学習者同士の交流を行った上で大学教員からの解説を行うことで、より学習者の理解が深まるのではないかと考えられる。この大学教員からの解説の際に、理論的背景や、意義、歴史などについても解説を行うと、理論と技術・方法の教授のバランスがとれると考えた。

そして、技術と方法を技能として修得させる必要がある場合には、模擬体験活動を用意し、実際に体験させることで、技能としての定着を図ることができるようにした。また、学生から質問があれば、教師が答えるようにすることで、さらなる学びを促すことができると考えた。

5-3 「学級経営の方法」を修得させることを目指した講義の提案

「学級経営論」や「学級担任論」などの、学級経営に特化して設定された講義科目は、15回の設定で行われていることから、以下、全15回という設定で、具体的な講義内容を考えていく。大切なのは、何らかの一つの学級経営に関する内容だけを教えるのではなく、1年目に現場教員として教壇に立ち、学級担任をもち、学級経営をしていく上で必要となる内容を過不足なく教えることであり、1年目の現場への適当がスムーズにできる力を養っていくことであると考える。

そこで、学級経営に関する内容を網羅的に含める形の講義内容を考えることにし、簡単な内容から難しい内容へと系統化させることとした。

参考にした大学での講義内容を含み、しかも、現場教師が大切にしている実践内容も網羅した形で考えていく。ただし、現場教師の実践と研

究に見られる学級経営の内容の中に、大学で教授されている内容が全て含まれていたため、講義のテーマ名は、現場教師の実践と研究に見られた学級経営に関する内容の名前で表記することとした。なお、全15回の講義回数であるため、複数の内容であっても、1単位時間の中で関連させて教えることができると考えられるものは1回の講義に含め、※印で示すことにした。

以下、学級経営に特化した講義の15回分の具体的内容を提案する。具体的な教授内容はタイトルの下に示すこととした。

- | | |
|--------------------------|---|
| 1 回 「学級事務の内容と方法」 | <ul style="list-style-type: none"> ・学習環境の整備と安全管理 ・学級通信、教材選定、各種文書作成 ・学級担任の一日の具体的な仕事 |
| 2 回 「学級のシステムづくりの方法」 | <ul style="list-style-type: none"> ・係と当番活動 ・学級活動の進め方 ・清掃と給食指導 |
| 3 回 「学級経営スタート時の指導」 | <ul style="list-style-type: none"> ※学級と個人の目標づくりの方法を含める。 ・学級びらきにおける仕組みづくり ・楽しい授業、成功体験の保障をどうするか ・学級のルール、モラル、マナーの徹底 ・学級と個人の目標づくり ・差別をなくす指導、いじめ防止 |
| 4 回 「ルール、マナー、モラルの指導方法」 | <ul style="list-style-type: none"> ※差別やいじめをなくす方法を含める。 ・学級崩壊とは ・道徳指導 ・差別をなくす指導、いじめ防止の継続方法 ・自由で規律のある雰囲気をつくり方 ・ヒューマンリキウム |
| 5 回 「集団統率とリーダーシップの発揮の仕方」 | <ul style="list-style-type: none"> ・学級担任の心得とリーダーシップ ・集団統率の方法 ・コーチングの手法 |
| 6 回 「子どもへの対応法」 | <ul style="list-style-type: none"> ※個別の生徒指導の方法を含める。 ・子ども理解と生徒指導 ・不登校の子どもへの対応 ・心理社会的支援の方法 ・発達段階に合わせた指導法 |
| 7 回 「特別支援教育の方法」 | <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育を要する子への指導と学級経営 ・ユニバーサルデザインの方法 |

8回	「集団づくりの方法」
	・望ましい学級集団づくりの方法
	・学級集団の現状把握の調査方法
	・トラブルへの対応方法
9回	「リーダーづくりの方法」
	・リーダー体験の指導方法
	・協調性を育てるための方法
10回	「イベントづくりの方法」
	・レクリエーション
	・教室の自由で楽しい雰囲気づくり方
	・子どもの活躍のさせ方
	・学校行事指導
11回	「子どもたちが学級経営に参画するための方法」
	・学級ファシリテーションの方法
	・話し合い活動
	・学級会の指導
12回	「授業づくりと学級経営を関連させる方法」
	・教科指導と学級経営
	・協同学習と学級経営
	・授業規律の指導
	・高い目標への挑戦のさせ方
13回	「学級経営に資する連携と協力の方法」
	・保護者、地域社会との連携
	・幼稚園や保育所などとの連携
	・学校経営との関連
	・各種関係機関との連携の仕方
14回	「学級マネジメントの方法」
	・学級経営案の作成と活用、評価
	・年間指導計画と必達目標
15回	「学級経営を進めていく上での理論的背景」
	・学級経営、学級編成の歴史と原理
	・学級の成長と発展の筋道と具体的指導法

講義は、ある程度学校現場での経験があった上で行う方がよいと考えられる。インターシップや、学校ボランティアなどの経験をもとに、事例検討を行うことや、ロールプレイなどの模擬体験活動を行う方が、より学校現場に即した方法が修得できると考えられるからである。そのため、1回生で本講義を設定するよりは、2回生もしくは3回生以上で講義を設定するのが望ましいと考えられる。

また先にも述べたように、内容は理論に偏ることなく、技術・方法もバランスよく教授する必要があると考えられる。そして、講義方法の考察でも述べたように、技術・方法を技能とし

て修得させるべき場合は、適宜、模擬体験活動を取り入れるべきであると考えられる。

具体的にどのように講義を進めるのかについては、先に述べたが、例えば第3回の「学級経営スタート時の指導」の講義であれば、次のような形で講義を進めることが想定される。

①学級の具体的な事例である「前年度の担任から引き継いだ学級の子どもたちの実態」を紹介する。その学級の実態では、前年度にいじめがあったり、ルールが守れなかったりする状況があることを示す。

②学生個人に、具体的な事例である「子どもたちの実態」から、どのような学級づくりを考え、どのような学級びらきを行うかを考えさせる。

③学生同士で、自分なりの方法を交流させる。

④教員による模範的な対応法の演示を行い、学級びらきにおける方針演説や目標づくり、ルール、モラル、マナーの徹底の仕方、差別をなくす指導やいじめ防止の指導法、楽しい授業や成功体験の保障の仕方などの実践例をいくつか示し、理論的背景の解説を行う。

⑤技術・方法を技能として修得させる必要がある「いじめの防止の指導法」や、「学級びらきにおける子どもの逸脱行動への対応」、「差別的な言動に対する対応」などの技能については、さらに具体的な事例をもとに、ロールプレイなどの模擬体験活動を行う。

⑥学生からの質疑応答に答える。

⑦学生個人に、学びをまとめさせる。

学級経営に関する内容は、その内容の多くに具体的な技術・方法が含まれており、学級経営に関する講義も、具体的な技術・方法の教授が必要になると考えられる。そのため、理論をきちんと教授するだけでなく、技術・方法を教授し、技術・方法を技能として修得させるための模擬体験活動の時間を確保することが必要にな

ると考えられる。

学級経営の方法を、学部の教員養成段階で確実に修得させるためには、より講義の内容も実践的な学級経営の方法を教授する必要がある、そのためには15回では講義の時間が足りないという事態も考えられる。今回は学級経営に関する課目を設定している大学の多くが15回という講義回数で教授を行っていたことから15回の講義内容と方法を提案した。しかし、仮に15回で不十分な場合は、先に示した15回の内容を教授した後に、実践的な内容である技術・方法と技能を主に教えるための演習形式の15回を、別の講義科目として設定することも考えられる。つまり、先に示した学級経営の内容を15回の講義で教授した後に、さらにより深く技能を学ばせた方が望ましい内容については、学生の実態に合わせて、15回の講義内容から適宜、教授する必要がある内容を抽出し、技能にまで高める時間をとるために、別途、演習形式の講義科目を設定するようにする。

例えば、「学級経営スタート時の指導」、「ルール、マナー、モラルの指導方法」、「集団統率とリーダーシップの発揮の仕方」、「子どもへの対応法」、「特別支援教育の方法」、「集団づくりの方法」、「イベントづくりの方法」、「子どもたちが学級経営に参画するための方法」などは、具体的な技術・方法が内容の中心となっており、技能にまで高めて身につける必要のある技術・方法が数多くあることが考えられる。この中で具体的にいくつか例を挙げると、「集団統率とリーダーシップの発揮の仕方」の講義内容の中では、集団を教師主導で導いていく場合のリーダーシップと、集団の後ろから支援する形のコーチング的なリーダーシップの仕方では、対応法に大きな違いがあり、それぞれのリーダーシップのやり方を、知識として技術・方法を知るだけでなく、技能として修得できるよう、具

体的な場面設定を行った上で対応の練習をすることが必要になると考えられる。他にも、「学級経営スタート時の指導」の内容には、先に示したように、技能として高めたい内容は複数あり、それらの内容を技能として修得させるには、時間の確保が必要になるとも想定される。その場合は、「いじめの防止の指導法」や、「学級びらきにおける子どもの逸脱行動への対応」、「差別的な言動に対する対応」、「学級びらきにおける方針演説」、「楽しい授業の実施」、「集団づくりのためのレクリエーション」など、技能として高めたい内容を抽出した上で、学生自身が興味関心のある内容を選び、書籍や論文などの資料を参考に、自分なりに望ましいと思える対応の仕方や指導法を考え、実際に実演してみるという活動を確保することが考えられる。

実演の際には、発表者以外の学生には、生徒役として参加するよう促し、模擬授業と同様の、いわば「模擬学級経営」をさせることで、実演者はもちろんのこと、生徒役として学級経営を模擬的に教授された学生も、多くの学びを得ることができるのではないかと考えられる。そして、インターンシップや教育実習、学校参観などと連動させて講義を行うことができれば、「模擬学級経営」で実施した内容を、実際の現場で適応することも可能になるであろう。

このように、今後の研究と実践を行っていく中で、もし技能にまで高めて修得させるのに、より時間をかけたり、高度な演習を行ったりする必要があると考えられる内容が見つかった場合には、別に15回の学級経営に関する講義科目を選定し、演習形式で進めることも考えられる。教授内容を抽出することによって、内容を限定した結果、演習形式の15回では講義時間に余裕ができる。余裕ができることで、より技能にまで高める時間の確保ができるだけでなく、演習形式の15回の講義の中では、実際に

学校参観や学校現場での体験活動を実施して、具体的な学級経営の事例を集めてきたり、講義で学習した内容を実践したりするなどの、現場往還型の講義も可能になると考えられる。

6 結論と今後の課題

学級経営の方法は、歴史を遡ると多岐にわたって様々な内容のものが存在する。初任者段階で、現場への適応がスムーズにできるためには、それらの内容を過不足なく大学の教員養成段階で教授しておくことが必要になると考えられる。現場教師の実践と研究に見られる内容が、大学で教授されていない場合もあり、今回の考察に見られるような講義内容の実施が急がれると考えられる。

今後の課題として、より学級経営の方法を効果的に修得させるための内容や方法を開発するためには、今回参考にした範囲よりもより広範囲に、継続的に調べる必要があると考えられる。また、今後に学級経営に関する講義課目の、学生に対する効果がどのようなものであったのかの研究内容が発表されてくると考えられるため、それらも参考にする必要があると考えられる。

また、今回提案したように、多岐にわたる学級経営に関する内容を網羅的に扱い、現場の具体的な事例をもとに、協同学習と教師による解説を取り入れた講義を行うことで、学生にどのような学びがあったのかの検証をすることが必要になってくると考えられる。

さらに、「教育実習」や、「教育実践演習」などの他の講義科目でも、学級経営の内容を教授することが一部可能であることから、他の講義科目との連携をどう進めていくのかも、今後の研究課題となると考えられる。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省中央教育審議会(2012)『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)』
- 2) 文部科学省中央教育審議会(2006)『今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)』
- 3) 大前暁政(2014)「小学校教員養成課程の変遷と課題に関する研究」『京都文教大学 臨床心理学部研究報告』6、pp.55-72
- 4) 文部科学省委託三菱総合研究所(2010)『教員の資質能力向上方策の見直し及び教員免許更新制の効果検証に係る調査集計結果』
- 5) 東京都教育委員会(2011)『小学校教職課程ハンドブック』
- 6) 米谷 茂則(2012)『小学校教員養成課程における「学級運営」科目の必要性とその内容』、有明教育芸術短期大学紀要3、pp.55-67
- 7) 大前暁政(2007)『若い教師の成功術』、学陽書房
- 8) 横浜市教育委員会(2009)「児童・生徒指導の手引き(文部科学省「平成19年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」等に関する県独自調査)」
- 9) 文部科学省研究委嘱 国立教育研究所学級経営研究会(2000)『学級経営の充実に関する調査研究(最終報告書)』
- 10) 教員養成課程の課程認定を受けている大学の総数については、文部科学省「教職課程の認定制度について 免許状の種類別の認定課程を有する大学等数」(2011)及び、文部科学省「教員免許状を取得可能な大学等」(2014)を参考にした。
- 11) 以下に示すシラバスを参考にした。千葉大学教育学部「学級経営論」(2014、天笠茂)、秀明大学学校教師学部「学級経営の理論と方法」(2014、中村克彦)、「初等学級経営論」(2014、深見眞一、田中正代)、近大姫路大学教育学部「学校・学級経営論」(2014、長瀬善雄)、富山大学人間発達科学部「学級担任論」(2014、長谷川春生、小川亮、小林真、澤聡美、松本謙一、水内豊和、阿部美穂子、川崎聡大、笹田茂樹、増田美奈)、福山大学人間文化学部「教育方法論」(2013、川地洋一)、学習院大学文学部「学級経営論」(2014、三浦芳雄)、

- 「教育方法・技術 B 一学級づくり・授業づくりの基本」(2014、久保田福美)、國學院大學人間開発学部「学校・学級経営論」(2014、宮川八岐)、東京家政大学家政学部「学級経営演習」(2014、半澤嘉博)、「学級経営論」(2013、半澤嘉博)、広島大学教育学部「学校制度・経営論」(2014、林孝、米沢崇)、福岡教育大学教育学部「学校と学級の経営学」(2014、鈴木邦治)、香川大学教育学部「学級経営論」(2014、毛利猛、植田和也)、京都橋大学人間発達学部「学級担任論」(2014、池田修)、常磐大学人間科学部「学級経営論」(2014、土門能夫)、白梅学園大学子ども学部「学級経営論」(2014、増田修治)、北海道教育大学「学級経営論」(2014、安藤英明)、「学校経営と学級経営」(2014、廣田健)、淑徳大学教育学部「学級経営の理論と方法」(2014、高橋敏)
- 12) 「いじめの防止」に関する内容については、北海道教育大学「学校経営と学級経営」(2014、廣田健)を、「学級崩壊の現状と課題」に関する内容については、白梅学園大学子ども学部「学級経営論」(2014、増田修治)を、「不登校などの支援が必要な子どもへの予防と対策」に関する内容については、常磐大学人間科学部「学級経営論」(2014、土門能夫)を、1年間の学級の指導方法については、秀明大学学校教師学部「学級経営の理論と方法」(2014、中村克彦)のシラバスを参考にした。
- 13) 秀明大学学校教師学部「学級経営の理論と方法」(2014、中村克彦)、「初等学級経営論」(2014、深見眞一、田中正代)
- 14) 富山大学人間発達科学部「学級担任論」(2014、長谷川春生、小川亮、小林真、澤聡美、松本謙一、水内豊和、阿部美穂子、川崎聡大、笹田茂樹、増田美奈)
- 15) 菊永 俊郎、牧原 勝志(2012)『学級経営の実践的指導力の育成を図る「教職実践研究Ⅱ」の取組：実地観察をもとにした学級経営案の作成を通して』鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 22、pp.257-264
- 16) 西村健吾(2014)『スペシャリスト直伝！小学校クラスづくりの核になる学級通信の極意』、明治図書
- 17) 野中信行(2006)『学級経営力を高める3・7・30の法則』、学事出版
- 18) 神谷和宏(2006)『図解 先生のためのコーチングハンドブックー学校が変わる・学級が変わる魔法の仕掛け』、明治図書
- 19) 磯野雅治(2010)『担任力をみがく！ー教室発 学級づくり実践論』、雲母書房
- 20) 大庭正美編(2011)『当番活動・係活動指導の急所ー子どもがハマる手立て』、明治図書
- 21) 加藤 辰雄(2003)『子どももクラスも元気になる小学校係活動マニュアル』、ひまわり社
- 22) 戸田 正敏(1997)『「学級ルール・学級マナー」の作り方』、明治図書
- 23) 戸田 正敏(2004)『失敗しない「学級づくり」の原則 36』、明治図書
- 24) 松永昌幸(2011)『学級生活指導の基礎スキル〈1〉生活ルール指導の定石ー良質な学級生活を創る』、明治図書
- 25) 横藤 雅人、武藤 久慶(2014)『その指導、学級崩壊の原因です！「かくれたカリキュラム」発見・改善ガイド』、明治図書
- 26) 堀 裕嗣(2012)『必ず成功する「学級開き」魔法の90日間システム』、明治図書
- 27) 岩瀬 直樹、ちよん せいこ(2011)『よくわかる学級ファシリテーション①ーかかわりスキル編』、解放出版社
- 28) 森重 裕二著、諸富 祥彦監修(2010)『クラス会議で学級は変わる！』、明治図書
- 29) 赤坂 真二(2013)『スペシャリスト直伝！学級を最高のチームにする極意』、明治図書
- 30) 河村 茂雄(2012)『学級集団づくりのゼロ段階ー学級経営力を高めるQ・U式学級集団づくり入門』、図書文化社
- 31) 河村 茂雄(2014)『学級リーダー育成のゼロ段階』、図書文化社
- 32) 学級づくり中央研究所編集(1992)『学級をイベントで鍛える技術』、明治図書
- 33) 青坂 信司編集(2006)『楽しいイベントで子ども集団は結束する』、明治図書
- 34) 石川 晋、佐内 信之、阿部 隆幸(2013)『協同学習でどの子ども輝く学級をつくる』、学事出版
- 35) 河田 孝文(2009)『“自由と規律”を使いわける学級システム』、明治図書
- 36) 奥田 巖文(著)、河田 孝文(監修)(2008)『いじめ

- を解決する危機管理マニュアル』、明治図書
- 37) 青坂信司(編)(2006)『“問題発生”を契機にした子ども集団づくり』、明治図書
- 38) 高橋正和(2003)『危機を乗り越える学級づくりの技術』、明治図書
- 39) 宮内 英里子(2013)『不登校予備軍の子どもによりそう対応・支援ガイド』、学事出版
- 40) 佐々木陽子(2013)『クラスがまとまる! 小学1年生学級づくりのコツ』、ナツメ社
- 41) 垣内 秀明(2013)『思春期の子どもの心をつかむ生徒指導10の心得 & 場面別対応ガイド50』
- 42) 小林幸雄(2006)『子どもへの対応技術の解明(下)』、明治図書
- 43) 伊藤 雅亮(2006)『グレーゾーンの子も育つバリアフリーの学級づくり』、明治図書
- 44) 赤坂 真二(編)、西川 純(編)(2014)『学び続ける教師になるためのガイドブック 自ら学ぶ学級・学校づくり編 ~上越教育大学流 教師力アップの極意~』明治図書
- 45) 沼澤 清一(2006)『子どもの笑顔で結ぶ保護者との連携—子育て共同体 育てるつもりが育てられ』、明治図書
- 46) 無藤 隆、寺崎 千秋、沢本 和子(2002)『21世紀を生き抜く学級担任(4) 学級の壁を超えた保護者、地域との連携』、ぎょうせい
- 47) 岡本 薫(2008)『教師のための「クラス・マネジメント」入門—プロのイニシアティブによる改革に向けて』、日本標準
- 48) 河村 茂雄(監修)、武蔵 由佳(編)、杉村 秀充(編)、水上 和夫(編)、藤村 一夫(編)(2012)『集団の発達を促す学級経営 小学校高学年』、図書文化社
- 49) 河村 茂雄(2010)『日本の学級集団と学級経営—集団の教育力を生かす学校システムの原理と展望』、図書文化社
- 50) 落合 幸子、築地 久子(1994)『自立した子を育てる年間指導』、明治図書
- 51) 宇佐美寛(2004)『大学授業の病理—FD 批判』 東信堂
- 52) 渡辺貴裕(2010)『学校での学習に対する固定的イメージを問い直す教育方法論・教育課程論の授業』、教師教育研究 23、pp.95-105
- 53) エリザベス・パークレイ・パトリシア・クレア・メジャー・

安永悟監訳(2009)『共同学習の技法』 ナカニシヤ出版、pp.18

Abstract

A Proposal for Lecture Content Based on the Theory of “Classroom Steering” for School Teachers

Akimasa OMAE

Class management is one of the important duties undertaken by teachers. Students in teacher training courses are required to learn class management methods. However, specializing in class management does not always prepare one for teaching at a university, as the contents of lectures can differ across universities. Thus, it is necessary to introduce many contents into lectures to make students understand class management methods and acquire class management skills. In particular, it is necessary to introduce the technique of the class management school site teacher is doing in the lecture. Additionally, when lecturing, university teachers should devise their own teaching methods. It is requested that I am giving them a lecture by the shape that cooperative learning as well as the way to tell simultaneously were also taken in. I proposed how I hoped that you were telling what kind of contents in 15 times of lecture.

Key words : classroom management, teacher-training program, collaborative learning